

同

フラヌ

内藤 正義  
中島 エン 外一名

さてこの様な資料があるので、筆者も充分注意して村内を調べたが、遂にそれらしい農場、団体、牧場の発見出来ない場合もあるのである。

また現在の人々に知られている地主の父の名となつてゐるものもあるが、次に示す各農場、団体、牧場は現在知ることの出来る限りの調査はしたつもりである。

そしてこれらの調査は現在に及ぶまで全部まとめてこゝにのせることにした。砂金の場合と同様年代別記述編であるが農場、牧場、団体に関することはこゝに全部まとまつてゐることが資料として利用する上に便利だと思ふからである。

## 第三章 団体移住

### 第一節 団体

団体移住というのは同一県人とか、同郷者が共同で国有未墾地の無償貸下げをうけ、団体長の指導のもとに移住して開墾をし数年後に附与検査をうけて各戸とも自作農となつたものである。

同郷の人々の間の親和と友愛と団結を基調としてゐるので、初めから地主と小作の關係がないのが特色である。

団体とは土地開墾、農業經營の目的を以て北海道庁の規定により、若干人員結合を為し山林原野の貸付を得移住するものを云ふ、最初は三十五人以上なりしが昨今は十人以上に改正せり。(明治四十二年——上富良野誌)

### 第二節 伊勢団体

幾寅市街の基線令号の十字街から村道を西北に向つて走ると二号線と三号線の間で空知川の手前のイクトラッベツ川の伊勢橋に達するが、伊勢橋と言つてゐる通りこゝから伊勢団体となるのである。

このイクトラッベツ川は大水の出るたびに荒れて、しばしば流域を變更してゐるので、はつきりしたことは分らないが、開拓当時は空知川の更生橋だつたということである。こゝが東北の境界である。

更生橋を渡つて更に西北に進むと、七号線附近から山にかゝり、八号線と九号線まで登ると道有林に達するがこゝが西北の線である。

南西は空知川が境界であるが、七号と六号の間は南一線と二線の間となつてゐる。東北は道有林に接しながら西一線の空知川に初まり、曲り曲つて約一里半、西八号まで及んでいて直線に見ても一里は充分にある長さである。

面積は約三百五十町か四百町、實際耕されている農耕地が三百町歩と見積られてゐる。空知川が有史以前からきづきあげた沖積土が大部分で、農産物の総売上げは（昭和三十二年頃）約二千万円、岐阜の一千万円、松井の一千万円、鹿越の三千万円と共に幾寅の穀倉であるが、金山ダムが出来たときはほとんど湖底に沈むことになるということである。

この団体は三里柴畷南郡茅広村字茅原の人、木田幸次郎が、山間のせまい土地で耕地も広くない郷土から広い未墾の北海道に注目して組織した団体の移住したところである。

明治三十三年、三重県庁にいた木田幸次郎は、同じ役所につとめていた水野某と相談して明治の風雲に乗じて北海道に団体移住をする手続をすゝめ、広く人々によびかけたのであつた。

集つて来た者は四十戸だつたが、次々に脱落して實際

に移住したのはかなり減少してゐた。

そして入地すると同時に見なれない北海道の樹木の屋敷をおくらく茂つた有様や、熊笹の一面にはえてゐる姿におそれて帰国する者も多かつた。

入地の時数元年二十才だつた角谷きく、当時中田きくさんの話によると手続其他は一切水野某がとつたということであるが、この人は一行と共に来たが直ちに帰つた組である。

幽遠な古から自然がほしいまゝにつくりあげた大自然はさすがに移住民の前に立ちふさがつてきた。

先ずこの大樹木をきり倒す技術を知らなかつた。だから根本をきるのは馴れた人をたのみ、自分達はこれをこまかく切る仕事をした。今の様に木材や薪が売れない時なので、うずたかく積みかさねては火を放つて毎日毎夜の様に焼いたが、この大きな火をたくことは何か愉快なものだつた。

それは男の子が棒きれをもつと気が荒くなり、女の子が人形と遊ぶとおしやべりになるのとよく似てゐる。

根もとが煙筒位もある藪が人々を驚かせ、非常にめづらしかつたので、この中に木を入れて乾かし油でみがい作つたステッキを郷里へおくる者もあつた。

その位だからアイヌ以前に北海道に住んでいたと伝えられるコロボツクルという小人は「露の葉の下に住む人」という意味だというが、日本人もこの露の葉の下を通つて歩いたのである。

後に「幾寅もこの頃は東京位になった」と移住の時見えてきた東京を思出しながら餅をついた時、使用した餅のし板はその頃の巨木をしのぶ記念品となつたそうであるが、三尺以上のカツラの木なのである。

その頃このカツラでつくつた板を伊勢におくつたが、北海道のカツラ一枚板の戸は随分めずらしがられたということがある。

燃える木の皮——という名で白樺や真樺の皮が小包にされた。

団体移住の主旨に賛成して乗船したのは、四十戸だつた。四十戸といつても家族づれはたつた一人、その他は皆独身だつた。

本田幸次郎団体長も母親と妻と二人の子供を団にのこして一人の気軽さだつた。姉の木田えひ(エイ)も夫と子供は内地において一戸分の土地の貸下げをうけた。

移住後五年目に成功検査をうけたが、農場や牧場とちがつて、地主小作等の関係がないからこのときすべて登

記をうけ各自の所有地となつている。

星移り、年は変つて變転五十年、当時の移住者で現在こゝに居るのは角谷きく(当時中田きく)たつた一人、山上鹿吉はその子の孝になつて伊勢に残つている。中田嘉助は市街地に移つてその子三雄が現存するが、堀口十郎兵衛も遂に帰国した。こうして伊勢団体には伊勢の人がいなくなつて現在半数に近い宮城県人がいるということである。

### 第三節 岐阜団体

幾寅市街地の基線令号の十字街から、一線国道を東北に向つて浅野牧場方面に向うと、市街をはなれるとすぐに岐阜団体となるのである。

西北の方は伊勢橋(イクトラシベツ川)において伊勢団体と界し、(伊勢橋と更生橋の間もその頃岐阜であつた)西南は鉄道を幾寅市街地に向う線で、東南は東一号线まで、東北は空知川になつている。

このうち市街地と、市街地の東南は基線(つまりこれは一級国道であるが)から約百間だけはなれている。約百二十八町歩、この中には内藤農場から流下してくるイクトラシベツ川の下流が複雑な形にうねりうねつて空知